

## 研 究

名古屋市における保育園児の母親の麻疹予防接種  
に対する意識と行動瀬川 英男<sup>1)</sup>, 平光 良充<sup>1)</sup>, 五島 明<sup>2)</sup>

## 〔論文要旨〕

われわれは、2008年の夏から秋にかけて、名古屋市立保育園通園児の母親を対象に、麻疹予防接種についての質問紙調査を実施し、有効回答1,150件を検討した。その結果、子どもの第1回目の麻疹予防接種率は88.0%であり、1歳児の麻疹予防接種のピークは、接種可能になった最初の1か月間であった。出生順位が後になるほど麻疹予防接種率は低下する傾向を示した。25歳以下の母親の子どもの麻疹予防接種率は低かった。麻疹予防接種を受けやすい環境を保育園通園児の母親に提供できる社会環境を作っていくことが重要であることが明らかとなった。

Key words : 麻疹, 予防接種, 保育園, 母親

## I. 緒 言

わが国は、国内からの麻疹排除を2012年までに行う姿勢を示している。そのため、麻疹の定期接種を第1期と第2期の2回にし、それぞれの接種率を95%以上とすることを目指している<sup>1)</sup>。この方針を成し遂げるためには、その時々麻疹予防接種に関する状況を把握し続けていなくてはならない。保育園児は麻疹予防接種対象年齢を含む集団であるが、麻疹予防接種率が低いとの指摘がある<sup>2)</sup>。そこでわれわれは2008年夏から秋にかけて、保育園児を持つ母親の麻疹予防接種に対する意識と行動を把握するため、質問紙調査を実施した。また、関東地方を中心に2007年春に発生した、大学・高校などでの麻疹集団感染事例がニュースなどで大きく取り上げられた事実に対する母親の意識についても調査した<sup>3)</sup>。

## II. 対象と方法

## 1. 対象者の選定

名古屋市子ども青少年局保育運営課の協力を得て、名古屋市内16区および支所管内から1ヶ所ずつ、合計21の市立保育園を選定し、園児の世帯数に応じた協力依頼文並びに質問紙を配布した。協力依頼文には、質問紙に答えるか否かによる対象者への不利益は一切ないことを明記し、質問紙は匿名とした。同一保育園に2人以上の子どものを預けている家庭には、任意の1人を選択して回答するよう依頼した。協力依頼文並びに質問紙は2008年8月25日から各保育園への配布を開始し、同年10月10日までに回収した。

園児および両親の年齢には、2008年10月1日時点の年齢を用いた。

質問紙の配布枚数は、1,738組、回収数は1,238組(回

Attitude and Behavior of Mothers of Children Attending to Nursery Schools in Nagoya City toward  
The Measles Vaccination

Hideo SEGAWA, Yoshimichi HIRAMITSU, Akira GOSHIMA

1) 名古屋市衛生研究所疫学情報部(研究職)

2) 名古屋市衛生研究所疫学情報部(医師/小児科)

別刷請求先: 瀬川英男 名古屋市衛生研究所疫学情報部 〒467-8615 愛知県名古屋市瑞穂区萩山町1-11  
Tel: 052-841-1511 Fax: 052-841-1514

[2225]

受付 10. 3.26

採用 10.10.30

収率71.2%)であった。この中から子どもの出生日未記入・誤記入, 子どもが2008年10月1日現在1歳未満, 母親以外の回答は除外した。その結果, 1,150件を今回検討した。

## 2. 麻しん定期予防接種制度の変更

2006年4月1日以降, 第1期を1歳児, 第2期を小学校就学の1年前の日から前日までの間に合わせて2回行う制度となったが, 2006年3月31日以前は, 生後12~90か月未満に1回接種を行う制度であった<sup>4)</sup>。本研究で対象とした子どもたちは, いずれかの制度下にあった子どもたちである。

いずれの制度でも, 初回接種の開始日が生後12か月からであることは変わらないので, 今回の報告では, すべての子どもに関して第1回目の麻しん予防接種および関連事項の検討を行い, 第2期接種以降の麻しん予防接種に関する検討は除外した。

## 3. 質問紙の内容

以下の, 大きく分けて2つの項目について尋ねた。

### i. 子どもと麻しん予防接種についての一般的な質問

子どもの属性, 父母の年齢, 同居家族, 子どもの麻しん罹患の有無, 子どもの麻しん予防接種歴, 麻しん予防接種を受けさせた理由, 麻しん予防接種を受けさせていない理由など。

### ii. 2007年の関東地方を中心とした麻しん集団発生に関連する母親の意識

2007年の関東地方を中心とした麻しん集団発生の記憶の有無, 一連の報道を知った情報源, ニュースが大きく報道されたことに対しどのように感じたか, 一連の報道の後に子どもに麻しん予防接種を受けさせたかどうか, 一連の報道は麻しん予防接種を子どもに受けさせる動機となったかなど。

## 4. 調査データの有意確率の検定

SPSS 16.0J for Windows を用いて有意確率の検定を行い,  $p < 0.05$  を有意とした。

## 5. 倫理への配慮

本研究は, 名古屋市衛生研究所疫学倫理審査委員会の承認を得て行われた。

表1 子ども属性と麻しん予防接種

	麻しん予防接種				検定
	接種済み (人)	%	未接種 (人)	%	
計	1,012	88.0	138	12.0	
子どもの性					$\chi^2$
男	518	86.8	79	13.2	$p = 0.196$
女	490	89.3	59	10.7	
出生順位					$\chi^2$
第1子	505	90.3	54	9.7	$p < 0.001$
第2子	310	87.8	43	12.2	
第3子	88	83.0	18	17.0	
第4子以降	18	62.1	11	37.9	
母の年齢					$\chi^2$
21~25	37	74.0	13	26.0	$p < 0.01$
26~30	170	88.5	22	11.5	
31~35	345	86.9	52	13.1	
36~40	333	90.7	34	9.3	
41歳以降	106	87.6	15	12.4	
父の年齢					$\chi^2$
21~25	15	78.9	4	21.1	$p = 0.242$
26~30	100	85.5	17	14.5	
31~35	282	91.3	27	8.7	
36~40	332	90.7	34	9.3	
41~45	143	90.5	15	9.5	
46歳以降	58	86.6	9	13.4	

## III. 結 果

### 1. 麻しん予防接種率

保育園に通園する予防接種対象年齢以上の子どもで, 一回でも接種したことがある子どもは88.0%<sup>#</sup>であった。予防接種率は, 子どもを出生順位ごとに第1子, 第2子, 第3子, 第4子以降のグループに分けて比較をすると, 出生順位が後になるほど低下する傾向を示した( $p < 0.001$ )。麻しん罹患率は13名(1.1%)であった。母親の年齢が25歳以下では, 麻しん予防接種率が低くなった( $p < 0.01$ ) (表1)。同居家族の有無との関係では, 父親と同居している子どもの麻しん予防接種率がよく( $p < 0.001$ ), 子どもの祖母と同居している児( $p < 0.05$ )および子どもの父母のきょうだいと同居している児( $p < 0.05$ )の予防接種率は低かった(表2)。

### 2. 麻しん予防接種のタイミング

麻しん予防接種の接種時期を, 第1回目の接種について調べたところ, 接種可能な最初の1か月以内

<sup>#</sup>麻しん予防接種率=(質問紙調査で接種したと回答したもの/1,150)×100(%)

表2 同居家族と麻しん予防接種

	麻しん予防接種				検定
	接種済み (人)	%	未接種 (人)	%	
計	1,012	88.0	138	12.0	
同居家族__子ども					$\chi^2$
非選択	65	6.4	7	5.1	p = 0.557
選択	943	93.6	129	94.9	
同居家族__母親					$\chi^2$
非選択	54	5.4	10	7.4	p = 0.342
選択	954	94.6	126	92.6	
同居家族__父親					$\chi^2$
非選択	154	15.3	40	29.4	p < 0.001
選択	854	84.7	96	70.6	
同居家族__子どもの祖父					$\chi^2$
非選択	926	91.9	125	91.9	p = 0.985
選択	82	8.1	11	8.1	
同居家族__子どもの祖母					$\chi^2$
非選択	871	86.4	108	79.4	p < 0.05
選択	137	13.6	28	20.6	
同居家族__母親または父親のきょうだい					$\chi^2$
非選択	949	94.1	122	89.7	p < 0.05
選択	59	5.9	14	10.3	
同居家族__その他					Fisher の直接法
非選択	999	99.1	135	99.3	p = 1.000
選択	9	0.9	1	0.7	

に46.2%が、2か月以内に62.6%が、3か月以内に70.8%が接種を済ませていた(図1)。

### 3. 麻しん予防接種を受けさせた理由(複数選択可)

母親に麻しん予防接種を受けさせた理由を、選択肢を示してたずねたところ、表3のような結果であった。

### 4. 麻しん予防接種を受けさせていない理由(複数選択可)

無回答が多く、回答者は138人中64人であった(表4)。もっとも選択が多かったのは、「忙しくて連れて行けなかったから」であり、次に選択の多かった「その他」の自由記載欄には「当日の体調不良」、「卵アレルギー」、「自然に罹患する方がよい」と複数の母

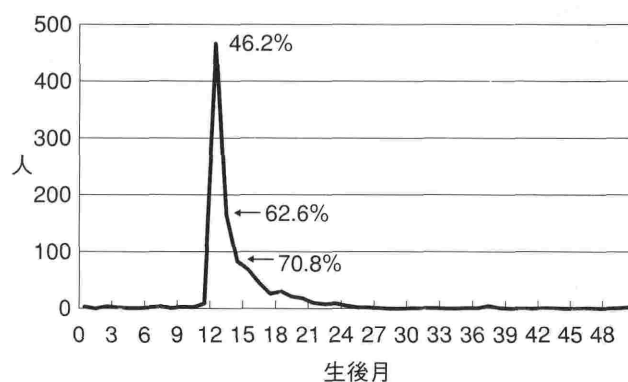


図1 麻しん予防接種のタイミング

表3 子どもに麻しん予防接種を受けさせた理由(複数選択可)

	選択 (人)	%	非選択 (人)	%
予防接種で防げる病気だから	707	70.0	303	30.0
保健所などの指導があったから	512	50.7	498	49.3
麻しんは恐ろしい病気だから	420	41.6	590	58.4
医療機関に行きやすかったから	155	15.3	855	84.7
麻しんにかかって数日間も欠席すると困るから	137	13.6	873	86.4
その他	69	6.8	941	93.2
特別な理由はない	39	3.9	971	96.1

表4 子どもに麻しん予防接種を受けさせていない理由(複数選択可)

	選択(人)	%	非選択(人)	%
忙しくて連れて行けなかったから	30	46.9	34	53.1
その他	11	17.2	53	82.8
予防接種のことを忘れてしまっていたから	10	15.6	54	84.4
まだ予防接種の対象年齢になっていないから	9	14.1	55	85.9
医療機関に行きにくかったから	9	14.1	55	85.9
特別な理由はない	8	12.5	56	87.5
予防接種の副反応による事故が恐ろしいから	7	10.9	57	89.1
麻しんにかかっても健康上大きな問題はないと思っているから	5	7.8	59	92.2
予防接種の前に麻しんにかかってしまったから	1	1.6	63	98.4

親が記入していた。

5. 2007年の麻しん集団発生報道に対する反応

2007年に関東地方を中心に、大学や高校などで麻しん患者が集団発生し、全学休校や学校閉鎖を実施するところが相次いだことについて、その報道を覚えていると回答した母親は、全体の91.5%であり、報道を覚えている母親の子どもの方が報道を覚えていない母親の子どもよりも予防接種率は高かった (p<0.001)。その最初の情報源(複数選択可)は、①テレビ(96.2%)、②新聞(41.3%)、③「人とのお話」(12.5%)と続いた。ニュースが大きく報道されたことについて、どのように感じたかをたずねた(複数選択可)ところ、「自分の子どもに麻しん予防接種を受けさせたほうが良い(既に受けさせていたのでよかった)」を選択した母親が92.9%を占め、このうちの91.1%が実際に子どもに麻しん予防接種を受けさせていた。それ以外の選択肢を選んだ母親は少数であった。

6. 関東地方の成人麻しん集団発生の報道に対する反応

麻しん集団発生の報道後(便宜上2007年5月1日以降とした)に予防接種を受けさせたと回答した母親(68

名)に、一連の報道は子どもに予防接種を受けさせる動機となったかどうかをたずねたところ、図2のような結果となった。

IV. 考 察

今回、保育園に通園している子どもの母親の質問紙調査結果から算出された、子どもの第1回目の麻しん予防接種率が88.0%であったことは、母親の「予防接種で防げる病気だから」という正しい認識とともに、保健所などの適切な指導も重要な要因であることが明らかとなった(表3)。しかし、麻しん予防接種率は2007年に名古屋市の1歳6か月児健康診査受診児を対象に調査を行った名古屋市予防接種業務研究会の調査結果である91.7%より低かった (p<0.001<sup>1)</sup>)<sup>5)</sup>。ニュースが大きく報道されたことをどのように感じたかについて選択肢を選んでもらったところ、「自分の子どもに麻しん予防接種を受けさせたほうが良い(既に受けさせていたのでよかった)」を選択した母親が多数を占めたことは、麻しん予防接種を肯定的に考える母親が多く、好ましい結果であると考えられる。また、「関東地方のことなので、名古屋には関係がない」、「特別な病気ではないので予防接種をしなくても大丈夫である」などの不適切な選択肢を選んだ母親が少数であったことは、今後の予防接種率向上に向けた取り組みを進めるにあたり、適切な働きかけをすれば麻しん予防接種率が大幅に改善される可能性が見込まれ、望ましい結果である。

同居家族については、父親と同居している子どもの麻しん予防接種率が高く、祖母と同居している子どもおよび父母のきょうだいと同居している子どもの予防接種率は低かった。このことは、家族形態と予防接種

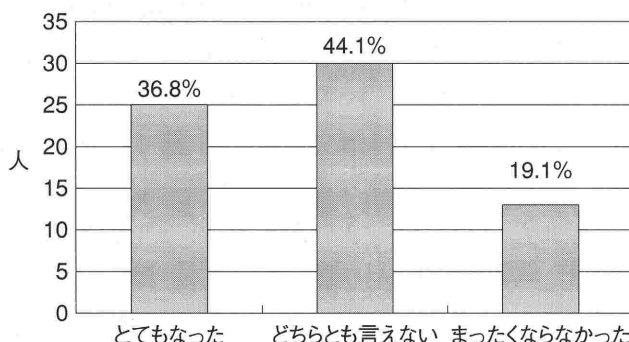


図2 一連の報道は麻しん予防接種を受けさせる動機となったか

<sup>1)</sup>原データとの有意確率の検定結果

率の間に何らかの影響を与えている因子が存在する可能性を示す結果であり、今後の検討課題である。

母親が子どもに麻しん予防接種を受けさせていない理由は、回答率が46.4%と低かったが、半数近い母親が「忙しくて連れて行けなかったから」を選択していた(表4)。親が子どもを医療機関へ連れて行くことができるだけの、心理的にも物理的にも時間の余裕を持てる社会を作っていくことが重要であると考えられる。

予防接種率が出生順位が後になるほど低下することについては、すでにいくつかの報告がある<sup>5,6)</sup>。今回の調査でも同様な結果が得られた。

麻しん集団発生の報道後に子どもに予防接種を受けさせたと回答した母親に、一連の報道は子どもに予防接種を受けさせる動機となったかどうかをたずねたところ、「どちらとも言えない」との回答が全体の4割以上を占め、われわれが意図した、より明確な傾向は把握できなかった。この原因として、3者択一という選択肢の設定が不相当であった可能性が考えられる。選択肢の数を適切に増やして設定しておけば、「とてもなった」が36.8%、「どちらともいえない」が44.1%選択されていることから、より明確な傾向が得られた可能性がある(図2)。

崎山らは、平成16年の人口推計年報から、未就学児の約28.5%が保育所に通っていると試算した<sup>7)</sup>。保育園通園児の予防接種率が非通園児に比べ低いとの報告は、既になされている<sup>2)</sup>。従って、この集団に対し重点的に麻しん予防接種を実施することができれば、わが国全体の接種率向上に高い効果をもたらすと考えられる。そのためには、保育園に通う子どもの母親に対し、麻しん予防接種の重要性をさらに啓発し、予防接種を母親の行動予定における現状の優先順位から、さらに上位に引き上げるように働きかけていくことが、保育園児のみならず、わが国全体の子どもの予防接種率を効率的に上昇させていくためにもっとも重要な事柄の1つであると考えられる。

## V. 結 論

1歳児の麻しん予防接種のピークは、接種可能になった最初の1か月間であった。

保育園児の母親、満1歳の誕生日から一定期間を過ぎても麻しん予防接種を行っていない子どもの母親、25歳以下の母親、出生順位が遅い子どもの母親を重点

的に啓発していくことが、麻しん予防接種率向上のために、重要かつ効果的であると考えられる。

国は、2012年までに日本からの麻しん排除に取り組む姿勢を示している。そのためには、子どもの麻しん予防接種率を1歳のうちに95%以上にすることがまず必要であるとしている。麻しん予防接種を受けやすい環境を保育園に通う子どもの母親に提供できる社会にすることが重要であると考えられる。

本研究の一部は、2009年10月、第56回日本小児保健学会(大阪)で発表した。

## 謝 辞

本研究を行うにあたり、質問紙調査に協力していただいた保護者の皆様、並びに質問紙の配布、回収を快く引き受けていただいた21の名古屋市立保育園の職員の方々に深謝いたします。保育園の選定から質問紙回収までさまざまな協力・配慮をいただいた名古屋市子ども青少年局保育運営課の方々に深謝いたします。協力依頼文および質問紙の印刷を全面的に行っていただいた友松博之主査に感謝の意を表します。協力依頼文および質問紙を各保育園に配布していただいた土屋博信氏並びに米澤彰二主任研究員に感謝の意を表します。

## 文 献

- 1) 厚生労働省. 麻しんに関する特定感染症予防指針. 厚生労働省告示第四百四十二号. 2007.
- 2) 加藤充子, 高橋裕明. 予防接種率に影響する因子の検討—三歳児健康診査問診票より—. 小児保健研究 1999; 58: 373-378.
- 3) 多屋馨子. 2006~2008年の麻疹流行と、2012年国内麻疹排除に向けた取り組み. 小児保健研究 2008; 67: 537-539.
- 4) 国立感染症研究所, 厚生労働省健康局結核感染症課. <特集>麻疹 2009年. 病原微生物検出情報(月報) 2010; 31: 33-34.
- 5) 名古屋市予防接種業務研究会. 名古屋市における麻しん予防接種の現状について第2報~麻しん根絶にむけて~. 第54回名古屋市公衆衛生研究発表会抄録集 2008: 35-36.
- 6) 名古屋市予防接種業務研究会. 名古屋市における麻しん予防接種の現状について~「麻しん撲滅」にむけて「未接種児ゼロ」をめざす~. 第53回名古屋市公

衆衛生研究発表会抄録集 2007: 11-12.

- 7) 崎山 弘, 河村一郎, 三浦義孝, 他. 保育園における麻疹ワクチン累積接種率の経年的変化. 日本醫事新報 2005; No.4252: 28-32.

### [Summary]

We carried out the attitude survey by questionnaire on the measles vaccination for the mothers of children attending to the nursery schools run by Nagoya City during the period ranging from summer to autumn of the year 2008, and examined the effective 1,150 responses. As a result, it was found that the proportion of the first vaccination of measles was 88.0%, and that the peak of

measles vaccination for one-year old children was within the first month of the period allowing vaccination, and that, the later the children were born, the lower the proportion of vaccination became, and that the measles vaccination proportion of the children whose mothers were less than 25 years old was low. It was suggested that it is important to establish the social environment that is capable to provide the mothers of children attending the nursery schools with an environment, in which they are willing to get the measles vaccination.

### [Key words]

measles, vaccination, nursery school, mother



## 改訂7版 母子保健マニュアル

編集 高野 陽, 柳川 洋, 中林正雄, 加藤忠明

発行 南山堂

A4判 222頁 4,800円(税別)

母子保健マニュアル改訂7版が出来上がった。1986年の第1版以来版を重ねてきた歴史の重みが、このマニュアルの中に詰まっている。

タイトルは、母子保健であるが、その内容は、母子保健統計、母子保健事業・児童福祉事業、家族計画、女性保健、胎児・新生児から思春期までの保健、性教育、子どもの精神保健、母子栄養、母子歯科保健、予防接種、事故予防・安全教育、障害のある子ども、小児期の疾病異常と対策までを幅広く取り上げており、これ1冊で子どもの保健対策全般にわたる膨大な情報を、網羅的に体系的に知ることができる内容になっている。

また、構成は表形式で見開きページで簡潔に解説しており、学びやすい工夫がなされている。その意味で、母子保健とその関連分野の最新情報を網羅した決定版ともいえるマニュアルに仕上がっている。母子保健関係業務の従事者に役立つ必携書であるだけでなく、この分野や関連分野を学ぶ学生のための教科書・参考書としても最適である。

本書の特徴として強調したいことは、母子保健関連分野の基礎概念を簡潔にまとめることに留意しているだけでなく、年表や主要な行政統計の経年的変化が随所にまとめられており、子どもを取り巻く社会環境は急激に変わりつつある現在、母子保健関連分野の歴史的流れや制度の変遷の理解を助ける工夫がなされている点である。

南山堂からは、「公衆衛生マニュアル」、「疫学マニュアル」、「社会福祉マニュアル」等も刊行されている。併せて読まれば、幅広く子どもの社会保障制度全般に関する知識を得ることができ、データに基づいて時代々々の子どもを取り巻く課題を振り返ることができて便利である。子どもに関わる関係者や関係機関には、是非手元に備え付けておきたい1冊である。

(独立行政法人国立特別支援教育総合研究所教育支援部 西牧謙吾)